

**墨田区介護予防普及啓発事業「腰痛・(膝痛)予防講演会について」**

平成24年11月20日(火)14時～15時30分 すみだ女性センターにて、同科の島村療法士とともに上記講演の講師をさせていただきました。当日の参加者は45名、平均年齢75歳で9割以上の方が女性でした。前週に林院長より「腰痛と膝痛を防ごう」というタイトルで受講されていましたので我々は実際に受講者の方に体操などを体験して頂くかたちで行いました。

前半は、腰痛や膝痛は個別性があり運動療法のみで予防するには限界がある事を説明した上で、日常の姿勢や動作の重要性を指導させていただきました。

後半には腰痛と膝痛の二グループに分け、少人数制で運動指導を行いました。腰痛予防では、良い姿勢で腹圧を高めて「天然のコルセットを作ろう」というテーマに時間をかけて実技を行ったところ、参加者より「こんなに自分の身体を意識した事はなかった、良い経験になった、これからも続けていきたい」などの声を頂きました。私たちも貴重な機会を頂き、とても良い経験となりました。

理学療法科 植松寿志



**高次脳機能障害支援普及事業**

**区東部圏域「専門的リハビリテーションの充実事業」高次脳機能障害相談窓口開設**

当病院では平成24年の11月1日より高次脳機能障害の相談窓口を開設いたしました。

この事業は墨田区・江東区・江戸川区において高次脳機能障害者を支援されている関係機関との連携をすすめ、地域で高次脳機能障害の特性に対応した医療・福祉・介護・就労等の支援機関からの相談に、専門的評価や助言指導をおこなうとともに、関係機関職員等の知識・技術等の向上を図ることを目的としています。

それぞれの区で行われている高次脳機能支援促進普及事業の連携体制を基に、当病院が地域の関係機関等へ高次脳機能障害のリハビリテーションに関する「アドバイザー業務」をおこないます。

高次脳機能の相談窓口の設置により高次脳機能障害の方々のご支援に役立てて頂ければ幸いです。

また今後、圏域連絡会や症例検討会、研修会についても開催する予定です。

その際には是非ご参加頂きまして、皆様方とのネットワークの推進も図ってまいりますので、よろしくお願ひいたします。

**ご相談受付** 毎週月曜日～金曜日 午前9時から16時まで(祝日を除く)

**連絡先:** 東京都リハビリテーション病院 医療福祉連携室 高次脳支援 相談窓口  
TEL;03-3616-5963(直通) FAX;03-3616-8699



**当院並びに区東部地域リハビリテーション連絡協議会開催の行事**

名称	日時	場所	備考
24年度 高次脳「専門的リハビリテーション充実事業」高次脳機能障害症例検討会	平成25年2月8日(金) 19:00～21:00	タワーホール船堀 江戸川区船堀4-1-1	対象:墨田区/江東区/江戸川区の高次脳支援機関 参加費:無料
24年度 高次脳「専門的リハビリテーション充実事業」高次脳機能障害 支援者向け研修	平成25年3月20日(水) 14:00～16:00	ティアラ江東 大会議室 江東区住吉2-28-36	対象:墨田区/江東区/江戸川区の医療・福祉・介護等関係機関職員 参加費:無料
25年度 区東部地域リハビリテーション 支援センター事業 療法士向け研修	平成25年6月9日(日) 14:00～16:00	ティアラ江東 大会議室 江東区住吉2-28-36	対象:墨田区/江東区/江戸川区の高次脳支援機関・医療・福祉・介護等関係機関訓練士や職員 参加費:無料
25年度 高次脳「専門的リハビリテーション充実事業」支援機関職員研修			

**区東部地域リハビリテーション連絡協議会**

東京都が指定する区東部の「地域リハビリテーション支援センター」である東京都リハビリテーション病院が事務局となり、墨田区、江東区、江戸川区の行政、医師会、医療機関、訪問看護ステーション、ケアマネジャー等を中心に組織され、地域リハビリテーションに関する資源調査、研修会の開催、諸問題の検討等の活動をしている団体です。(備考に問い合わせ先が無いものは下記事務局まで)

**【事務局】** 東京都リハビリテーション病院 医療福祉連携室 地域リハビリテーション科 担当:齋藤・山下・下田  
TEL03-3616-8600(内376) FAX03-3616-8699 ※電話は土・日・祝を除く9時～17時 FAXは24時間受付

**東京都リハビリテーション病院 連携だより**

第4号

平成25年1月1日発行

ほっとりハ

(発行)東京都リハビリテーション病院 医療福祉連携室  
〒131-0034 墨田区堤通2-14-1  
TEL: 03-3616-8600 FAX: 03-3616-8699  
URL: http://www.tokyo-reha.jp

年頭所感



新年、おめでとうございます。

東京都リハビリテーション病院は平成2年に設立され、今年で23年が経ちました。この間、当院は医学としては高いレベルを維持しながらも、医療としては標準的で分かり易い内容のリハビリテーションを実施して参りました。

これまでは、主として入院された脳卒中や骨折等の患者さまに対するリハビリテーション医療を中心にして診療して参りましたので、地域の皆様方との連携がやや希薄ではなかったのではないかと自問しております。

ところが、都民の高齢化が進む昨今、医療の分野でも介護の現場でも日常業務にリハビリテーションのマインド(こころ)を取り込んで心身の機能を向上させることが必要となって来ています。

この状況を鑑みて、当院では6年前から墨田区及びすみだ医師会の協働により実施されています墨田区在宅リハビリテーション支援事業には全面的に協力して参りました。さらに昨年末からはすみだ医師会の御理解を得て、地域の診療所、病院との間で連携協定を結ぶことに致しました。連携強化を目指して協定を結んで下さった各連携医療機関にとってリハビリテーション医療の点でメリットが生じるだけでなく、都民の一人ひとりにとって良い効果が見られるようにするために東京都リハビリテーション病院がどのように変容し・行動していけばよいのか、といった新たな命題に取り組んで行くことに致しました。

一方、院内では平成22年度以降に電子カルテの導入、32名の療法士増員、3.0テスラのMRI設置(平成25年4月稼働予定)と診療内容が飛躍的に近代化・高度化し、また増幅致しました。

全国の自治体の長兄としての東京都が設立し、東京都医師会が運営するリハビリテーション専門病院としての当病院は



質の高い病院機能を保有することになりましたが、この機能が年間800～900人入院される患者さまだけでなく、広く都内医療機関や都民の財産として活用していただくにはどのようにすればよいのか、といった病院内からの命題は上述した命題とも重複致します。

昨年度の年頭には当病院内で働く全ての職員が研鑽と努力を重ね、高揚した知識・経験により現場で把握した課題を既存の知識・経験を凌駕した対応法で解決しようと呼びかけました。

今年は現場で培われた課題対応策に加えて、質が高く量的に充実したリハビリテーション医療機能により生まれた成果の数々を地域の先生方、都民へ還元することこそ病院内外の命題解決に資するものと考えています。そして、例え加齢や障害により心身の機能が低下した都民の方々であっても、イキイキと暮らしていける社会の実現に向けて努力していくことをお約束し、新年の挨拶といたします。

平成25年 元旦

東京都リハビリテーション病院  
院長 林 泰 史



東京都リハビリテーション病院 と 朝日を反射したスカイツリー

# チョット Reha

第2回

## ボツリヌス療法



東京都リハビリテーション病院  
リハビリテーション医長 **阿部 玲音** (リハビリテーション科)

・日本リハビリテーション医学会認定専門医・臨床医

### はじめに

脳血管障害・頭部外傷・脊髄損傷・脳性麻痺などにより中枢神経障害を呈し、運動障害を持った患者さんでは、痙縮により筋緊張が亢進した状態になることが多く見られます。

痙縮が出現することで、麻痺した部位の関節可動域制限や動かした時の疼痛、姿勢異常、

運動機能低下などを呈し、歩行障害や日常生活動作への影響が見られることもしばしばです。痙縮に対する治療法は、経口薬などの薬物療法、物理療法、装具療法、モーターポイントブロック、MAB(Muscle Afferent Block)療法、パクロフェン髄注療法、脳神経外科的手術、整形外科的手術、ボツリヌス療法などが挙げられます。

今回のチョット Reha では、ボツリヌス療法について簡単に説明いたします。

今回のチョット Reha では、ボツリヌス療法について簡単に説明いたします。

### ボツリヌス療法とは

ボツリヌス療法とは、臨床用のボツリヌス毒素を筋肉内に投与し、投与した筋肉の神経筋伝達を阻害して、筋収縮を抑制する治療法です。ボツリヌス毒素は、ボツリヌス菌(Clostridium botulinum)によって産生される神経毒素で、7種類あるうちのA型が最も安定で毒素が強いとされています。1977年にScottがA型ボツリヌス毒素を初めて斜視に対して臨床応用し、その後さまざまな病態に用いられる様になりました。日本では1996年に臨床用ボツリヌス毒素である「ボトックス®注100」が眼瞼痙攣に対して承認され、その後、片側顔面痙攣・痙性斜頸・2歳以上の小児脳性麻痺患者における下肢痙縮に伴う尖足が適応となり、2010年には上肢痙縮・下肢痙縮の追加効能が承認されました。この時から脳血管障害をはじめとした痙縮に対して、ボツリヌス療法が広く使用される様になりました。なお上記の他にも、多汗症や表情筋の皺を目立たせなくするために、ボツリヌス療法は行われています。

### 痙縮に対するボツリヌス療法の特徴

痙縮に対するボツリヌス療法の特徴には、以下のものが挙げられます。

- ・ 痙縮が認められる筋へ直接注射するので、局所性の痙縮治療に有効
- ・ 効果は通常3～4ヶ月持続し、可逆的
- ・ 各種薬物療法・ブロック療法・リハビリテーション等の、他の痙縮治療法と併用が可能

また、2009年の脳卒中治療ガイドラインでは、ボツリヌス療法は痙縮の関節可動域制限に対し、グレードAで使用が推奨されています。

なお、ボツリヌス療法の禁忌としては、重症筋無力症やランバート・イートン症候群、筋萎縮性側索硬化症などの全身性の神経筋接合部の障害を持つ患者には投与できません。また、副作用として脱力・CPK上昇・注射部疼痛・筋痛などが挙げられます。

### 臨床用ボツリヌス毒素の投与方法

ボツリヌス療法は、痙縮が認められている筋に、筋肉内注射で臨床用ボツリヌス毒素を投与します。具体的には、上肢痙縮で手関節屈曲・握りこぶし状変形を呈するのであれば、橈側手根屈筋・尺側手根屈筋・深指屈筋・浅指屈筋などに対して行います。また下肢痙縮で内反尖足変形を呈するのであれば、腓腹筋・ヒラメ筋・後脛骨筋などに対して行います。



なお筋肉内注射を行う際には、必要に応じて電気刺激や超音波にて筋の同定を行うことで、より確実に注射を行うことが可能となります。当院の場合は、電気刺激で筋の同定を行いながら、筋肉内注射を施行しております。

痙縮軽減の効果の発現は、投与後数日から認められ、3～4ヶ月間その効果は持続します。その後効果が減少してくるため、必要に応じて反復投与を行います。その際、ボツリヌス毒素に対する抗体産生を減らすために、3ヶ月以内の反復投与は避けます。

なお、ボツリヌス療法の施行は、指定の講習および実技セミナーに参加した医師のみに限定されております。

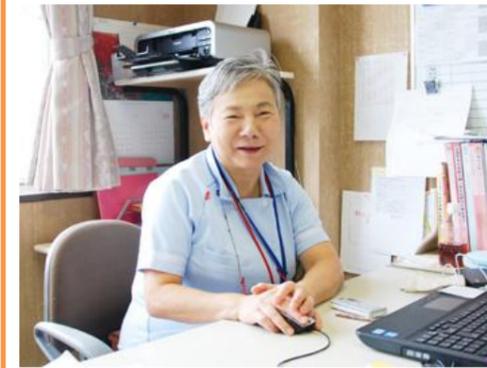
### 終わりに

ボツリヌス療法は、局所的な痙縮改善が認められる治療法です。ボツリヌス療法を行うにあたっては、目標の設定や投与筋の選定などの十分なプランニングが必要となりますが、それらをしっかりと行うことで、痙縮を軽減し、さまざま症状を軽減することが期待できます。

痙縮でお困りの症例があれば、ボツリヌス療法を治療の選択肢の一つとして、ぜひご検討ください。

### 職員紹介

看護科長 和田 玲



昭和48年(1973年)に都立広尾病院の看護師として  
出発し、様々な経験を経て今年4月に当院に着任しました。  
今までは脳神経外科病棟、ICU、手術室など急性期の看護に携わって来ました。

その後看護学校教員を10年勤め、再び臨床に戻り、都立病院の  
管理職としても13年間の経験をして来ました。

当院の看護部が取り組むべき課題は2つあると考えています。その一つ目は、リハビリテーション看護の質向上と地域で生活する患者さまとそのご家族の方への発信です。平成22年に「脳卒中リハビリテーション看護」認定看護師が誕生し、平成24年10月には「脳卒中リハビリテーション看護」認定看護師教育課程および「摂食・嚥下障害看護」認定看護師教育課程に派遣中であり、平成25年1月には「皮膚・排泄ケア」認定看護師の採用を予定しています。

今後は認定看護師を核として、病院内の看護の質向上と、地域で生活する患者さまとその家族の方々の相談に対応していきたいと考えています。また、当院から自宅に戻られる患者さまとその家族の方々が安心して地域で暮らせるために、地域に於ける認定看護師連絡会(仮称)などを立ち上げ、地域における看護の質向上にも寄与できればと考えています。

二つ目は、患者さまとそのご家族を支える看護師の職場環境の調整です。具体的には、患者さまの安全を確保するために、日本看護協会が打ち出す「看護職の夜勤・交代制勤務に関するガイドライン」で示されている13時間夜勤や2人夜勤から3人夜勤体制実現に向けた取り組みが必要と考えています。また、看護師の離職防止の観点から中堅看護師のモチベーション向上に向けた取り組みが必要と考えています。

現在、当院の看護科長として半年経過し、夢が膨らんでいるところです。第七医療圏看護管理者ネットワークや区東部地域リハビリテーション連絡協議会の活動や院内で行われている色々な取り組みに看護部門としても積極的に関わって、今までの看護科長たちが築きあげて来たリハビリテーション看護の更なる発展に寄与できれば良いかと考えています。

また、先日当院で行われたボランティアの方々による演奏会で、高次脳機能障害を克服された患者さまのハーモニカ演奏を聴かせて頂き、患者さまの回復過程に協力出来る仕事に関われることに感謝しています。

